

研究室への置き手紙

UDLM

vol.358
May 28th
2025



UDLM

AFTERWORDS from GRADUATE

修了を迎えた今、研究室のメンバーへ伝えたいこと



洲崎 玉代

気づいたら学部1年の時からデザ研と関わりがありました。ひょんなことから三文字さんと知り合って、1年生の夏に富士吉田の火祭りに連れて行ってもらったこと。そこから、色々な先輩方にお話を聞かせていただいたり、色々なところに引っ張っていただいたりしました。だから、入る前から「デザ研入ろう、もう入るよね、私」みたいな感覚で、勝手に思っていました。

入ってからも本当に楽しかったです。そして、既に社会に出られている先輩方、目の前にいる博士の先輩、後輩、先生方がいらっちゃって、デザ研は”コミュニティ”だと思っています。大きなコミュニティ、いつでも帰る場所。自分の興味関心によって、デザ研以外の都市工・工学系、あるいはそれにとどまらず、様々な地域に出かけたり、たくさんのプロジェクトに顔を出したりしました。それができたのはやはり、ここに帰ってくる場所があったからだと思います。他のところで得た経験や、「こういうことを感じたんだよね」ということを一緒に話す仲間たち、「どうしたらいいかな」ということを相談できる先生方がいる、本当にありがたい場所でした。今後もその一員であり続けたいと思います。感謝はしてもきれません。本当にありがとうございました。

“お別れという感じはしない”

森屋 友佑

追いコンをしてもらっているけれども、終わりだという感覚がありません。きっとこれからも関わっていくんだろうなと思っています。

デザ研以外の人と会うときに、一時的にデザ研の代表をしているような感覚と、外で得たものをデザ研にフィードバックしたいという気持ちをずっと思ってたので、それがこれからも変わらず続くんじゃないかなという気がしています。皆さんからずっと、たくさんの刺激をもらい続けていた。皆さんが、自分が何かを学ぶモチベーションになってくれていました。とても感謝をしています。

ということで、これからもお世話になるのですが、どうぞよろしくお願いします。



音山 尚大



修士課程の2年間、様々な面で支えてくださった皆さんに感謝申し上げます。最初に先生方とお会いしてから、6年間経っていることに自分自身でも驚いているのですが、その長い期間すごく自由に様々な活動をさせていただき、とてもありがたいなと思っています。

デザ研の「各学生のやりたいことに自由に任せる」寛容さと、ただ自由にさせるだけでなく、学生1人1人をきちんろ見てくださるところが特徴的だと思っています。例えば青木先生のリノベーションのプロジェクトのように、興味のある分野があった時に、「これやってみないか」とお誘いいただけたことがありがたかったです。最終的に、修論をはじめとしていろいろな形に収斂していったとき、この6年間の学びが自分自身の中に蓄積していったなと感じます。

修了はしますが、デザ研特有の空気感っていうのがあって、ここでお別れという感じは、あまりしていません。研究室の籍から抜けたとしても、何らかのプロジェクトや、日常の空いた時間の中で研究室に訪れるといった形で、自由に研究室に関わることが出来るのがデザ研らしいと思っています。これからも研究室に関わっていけたら嬉しいです。



山田 真帆

B4のデザ研配属時のマガジンに「デザ研しかないって思っていました」と書いた通り、B1でデザ研を知ってから、絶対にここに行くという気持ちと態度で、在籍を勝ち取ったことを覚えています。

そのまま迷うことなく修士課程でもデザ研に進みましたが、いざM1になると何を研究したらいいのか全然分からない。何でもやらせてくれるけど、こうすべきだということも示されない。そこに自分は戸惑ってしまって、「この研究室に向いていないのかも」と迷う時期もありました。結果的には、そのような時間こそが自分を育ててくれて、修士の間で経験した、研究・プロジェクト・地元との関わり方・文京区での活動・進路選択、全てを包含する自分の信念を見つけられたように思います。特に、修論はテーマに向き合うことがとても楽しくて、この研究をすべくしてデザ研にいると感じるほどでした。総じて、ずっと好きなことができた2年間でした。

進路としては一度都市を専門とするような分野から離れますが、好きだと心から思ったこの分野とずっと関わっていきたいと思っています。

先生方。生意気な学生だったと思いますが本当にお世話になりました。同期の皆さん。「同期だから集まる」ではなくて、「やりたいことが一致した結果一緒にいる」関係性が、とても心地良かったです。修論の時も支えました。また何かしたいことが一致したときに集まりましょう。

ありがとうございました。

戴 昕雨

2年半前にデザ研に入って、最初は何もできなくて、英語しか話せない状態でしたが、今はみなさんとの交流の機会を通じてちょっとうくなりました。

最初是中島先生、永野先生、青木先生と一緒に、東京、そして富士吉田といった素敵な街のありかたを学びました。あまり知られていない街や空間も、今は大好きになりました。それはデザ研以外ではできなかったと思います。これからも街に対する愛を持って頑張ります。

日本で就職するので、みなさんと会う機会もあると思います。これからもよろしくお願いします。



金 盼盼

博士号をいただきました。とても嬉しい気持ちと、少し緊張もあります。まだまだ力不足ですが、ここまで来られたのは、皆さんの支えのおかげです。

研究や生活で助けてくださった先生方、たくさんの時間を共に過ごした博士の仲間、毎日笑顔で挨拶してくれる修士の後輩たち、内容もデザインも素晴らしい研究室マガジン、そして今もどこかで繋がっている力強い先輩方。そうしたすべてが、私の中で「東京」という大きな街のイメージを、形作ってくれました。

これからも努力を続けて、自分なりに真理を探索していきたいと思います。本当にありがとうございました。



小林 夏月

この2年間はとても目まぐるしいものでした。それでも多くの人に支えられて、無事に修了することになりました。

中島先生。何度も相談に乗っていただいたおかげで、無事に自分の興味と研究テーマが結びついたものになりました。先生の“言葉への意識”をととても尊敬しています。

永野先生。みなかみPJでたくさんお世話になりました。最初は少し怖かったのですが、こんなに学生想いの先生にお会いしたのは初めてです。健康が心配なので、体調をお気をつけてください。

青木先生。まさか一緒に卒業することになるとは思っていませんでした。研究室会議で、「話が変わってしまうんですが」と毎回言いながらも、新しい視点からご指導くださるのが新鮮でした。

博士の先輩方。英語が苦手な私ともコミュニケーションを取ろうとしてくださって、とても嬉しかったです。研究のアドバイスをいただいたこと、すごく励みになりました。

後輩の皆さん。本当に可愛い子ばかりです。特にプロジェクトが一緒だった子や、設計課題と一緒に取り組んだ人たちには、頼りない先輩で、私が支えてもらえばかりだったと思いますが、一緒に大変なことも乗り越えることができてよかったと思っています。これからまた研究室が大きく変わるタイミングになると思いますが、自分たちのデザ研を作り上げていってください。

最後に同輩のみんな。キャラが濃くて最初はすごく心配でしたが、プロジェクトでも、そして特に修論の期間はすごくお互いに支え合って、みんなで修了することができました。一緒に学べてとてもよかったです。

ありがとうございました。



元吉 千遥

学部の演習で、実際に自分が考えたことをどうしたら反映させられるのかな、ということを考えるのが楽しくて、プロジェクトに入りたいなと思ってデザ研に入りました。2年間、研究というよりは、プロジェクトに踏み込みながら頑張ってこれたかなというのが自分の修士の総括です。

学生だから受け入れてもらいやすく、多少の失礼や失敗があったとしても、みなさん本当に寛容に受け入れてくださいました。だからこそ、自分ももっと町のために頑張りたいな、とか、うまくいくかわからないけどやってみようかなと、チャレンジできた2年間でした。

次M2になるみなさんは、これからプロジェクトを引っ張っていく立場になると思います。上がいなくなって自分たちの代になると、やりたいことができるようになるので、街の人たちに協力をいただきながら進めると、楽しく学べるんじゃないかなと思います。

一方で、もう少しできたらよかったと思っているのは、2年間で得た膨大なインプットを、自分の中で整理するということです。プロジェクトの途中で振り返りながら様々な要素のつながりを自分なりに考えることが大事だと思うし、授業を受けて人の話を聞きながら整理するというのもすごく重要だと思います。私は修士で単位ギリギリしか取っていなかったのですが、あまり授業からのインプットをうけられなかったのですが、M2のみなさんは春なら授業を取ることができると思うので、忙しくなる時期ではありますが、取ってみるのもありんじゃないかなと思います。

独立行政法人国際交流基金というところで働きながら、博士後期課程をようやく修了することができました。

時間のやりくりが難しく、先生方に日が暮れてから指導していただく機会も多くありました。 まち大ゼミは夜の12時をまわることもありました。遅くまで真摯に向き合っていて、博論執筆を終えられました。4月からは、仕事が続きますが、非常勤講師など研究教育系でも貢献していけたらと考えています。

仕事をしつつ地域の環境保全を研究していて強く感じたのは、地域はこれからの時代のあり方を模索している段階であること、これからの時代の社会やまちの築き方を自分たちで信念を持って考えていかなければいけないということです。組織で仕事をしていると、会社が色々なものを与えてくれたり、制度が整っていたりすることが多く、自分自身が考えなくても回っていくんだけど、それではいけない。都市デザイン研究室の皆さんそれぞれの、何が大事かを考えて研究や設計を通して世の中に出していく姿勢は、社会においてメジャーではありません。それは、これからの社会にとって大事な姿勢であり、これからも、与えられた環境をひとつ疑ってみて、変化の時代に自分がどんな社会をつくっていけるのか考えていただきたいと思います。そういうことを考え一緒に社会をつくっていくことで、どんどんいい方向に変えていけると思いますので、同志として、これからも一緒によろしくお願いします。

玄田 悠大



“同志として、これからも一緒に”

水野 謙吾



2年前にデザ研入ったとき、大きく2つの目標がありました。1つは都市デザインとは何かを知りたいということ。もう1つは先生方や学生の記憶に残るような人になりたいということです。

1つ目に関して。自分の考えでは、「歩くこと」です。器用に効率的に進めることや、ソフトやデータを使いこなすということがとても苦手なので、プロジェクトや研究でも、自転車と足を使って泥臭くデータを取るという機会が多くありました。無駄な時間を過ごしてしまったかなとも思いますが、そこで出会った人や、彼らと話したこと、偶然見たものなどが意外と印象に残っていたり、別の学びを得たりすることが度々ありました。そういう、ちょっと無駄かなっていうことに労力をかけることに抵抗がない、「足で稼ごう」と思える人だと気づいたので、仕事でスケールの大きいものを扱うことになっても、歩くことを大事にしていきたいです。

2つ目。心に残る人になるということができなかったというのは、この2年間で最も悔しい部分です。でも将来の夢はできました。地元の宝塚市で、死ぬまでに絶対何かをしたいということです。色々なプロジェクトで様々な街に行き、たくさんの人の話を聞く中で、自分の町にはいいところがたくさんあるということに気づきました。僕は宝塚出身であることにプライドを持っていて、出身地を問われたときにも、「兵庫」ではなく、必ず「兵庫の宝塚市です」と言うようにしているぐらいに好きな町です。宝塚のいいところを、これから宝塚に住んでもらう人に知ってもらいたいし、今は様々な課題を抱える街だけでも、住みたいと思ってもらえるような街にしていきたいです。それが達成できたときに、「あいつはデザ研っていうところにいたらしいぞ」ということで、恩返しができればいいかなと思っています。

最後に。関西からぼっと出てきて、不安もたくさんあったのですが、先生方はじめ、学生の皆さんもあたたかく迎えてくださって本当に嬉しかったです。いったん卒業ということになりますが、これからもよろしくお願い致します。ありがとうございました。



青木 公隆 特任助教

2015年、日本設計をやめて3年ほど経った時、「空き家を再生することが建築家に求められているが、たくさんの空き家ひとつひとつをつなげていかなければならない。その延長線上にまちづくりとか都市デザインがあるかもしれない」ということで、都市計画を学ばなくてはならないという思いを抱きました。そこで迷ったのが、出口研が都市デザイン研でした。窪田先生、西村先生、出口先生にお会いし、自分の活動を紹介し、お話しする中で、最終的には、アーバンデザインの実践をしている出口先生の研究室へ進んで博士論文を書きました。ということで、2015年ごろから 実は都市デザイン研究室のことをよく知っていて、丹下先生が設立された建築家にとって憧れの研究室ということもあり、ある種の片思い、ずっと二股みたいな気持ちでした。

そして2022年。博士論文を書き終えた時に少し時間に余裕ができたことに加え、永野先生をはじめ様々な縁もあり、都市デザイン研究室の特任助教として着任することになりました。片思いが実ったような感慨があり、大変嬉しかったことを覚えています。ただし、その一方で、非常に怖くもありました。都市デザイン研究室は都市デザインの日本一の研究室だと当時から思っていたので、都市計画分野を少しかじっただけの人間が果たして指導できるのかと非常に不安でした。それでも、自分が今までやってきたことを信じて、永野先生や中島先生が持っていないような観点があるとすれば、そこからコメントするのが僕の役割なのかなという思いで、2年間ぐらいで過ごしてきました。色々なコメントをしましたが、少しでも記憶に残っていると、大変よかったなと思っております。

このタイミングで伝えなくていけないのは、先生方への感謝の気持ちです。

まず永野先生。地域に深く入り込み、歴史や、地域にどういう人がいてどういうことを考えているのか、何を求めていくか、そこに向けてどのようにアプローチしていくかという点において、自分の思うままにまちづくりや都市デザインをしてきた僕には到底及ばないくらいに深く入り込んでいる永野先生から学ぶ点が非常に多くありました。永野先生に負けないように、もっと地域に深く入り込んでいかなければいけないなと思っております。

中島先生。僕はここ10年くらいずっと、黒いスケッチブックに気になったことをメモしています。これを見返すと、その年、何に影響を受けて、何を考えていて、どのようなアウトプットをしたかを振り返ることができるのですが、この2年間、一番メモしたのが中島先生の言葉でした。研究室会議や社会連携講座での発言などがメモとなって、2年間で3冊ほどたまっています。それくらい、中島先生は、僕には思いつかないような広い視野の観点からの確かなコメントを言われていて、毎回メモを取りながらもっと頑張らなきゃいけないなと思っていました。2年間だけではありませんが、これから先、実務としても、研究者としても、大きな指針・目標となりました。

長くなりましたが、4月より、母校の東京理科大の建築学科に准教授として戻ることになりました。入学したのが23年前で、ここから退官までも23年間あります。ちょうど折り返し地点であり、何か運命なのかなと思っています。23年間という長い期間をかけて、都市デザイン研究室に負けないように、そして、全国の建築家を目指す学生たちの憧れる場所にしていきたいと思っています。研究室の専門分野として、建築の意匠・設計だけでなく都市デザインも加えています。独立後の30代後半から40代にかけて出口先生や都市デザイン研究室で学んだ経験があるので、専門分野に都市デザインをつけて、これから、都市デザインも含めてより自分自身も活躍するとともに、社会で活躍する人材を送り出していきたいと思っています。

これからも末永くよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

PLAYBACK 2024s



中島先生の教授就任特集から始まった20年目の都市デザイン研究室マガジン。節目の年に相応しく、マガジンの意味を問い直す場面が多々あった。

マガジンを実際の都市体験の媒体とすべく、「マガジン片手に、まちを歩こう」のテーマの下開始した「まちBINGO」。読者を意識した企画であったが、各月の副担当がビンゴに入れる写真を撮るために、自身がまちを歩き、普段とは少し異なる視点でまちを見る機会にもなっていた。

また、「自分たちのマガジンだ」という意識も強く現れたように思う。例えば、自身の研究に還元したいという意図の号。vol.346、vol.353はいずれも主担当東條の研究テーマに深く関連しており、同時にテーマの変化も一目瞭然である。vol.349では、各々の研究の進捗を振り返る企画を通して研究のモチベーションにつなげることを試みた。一方で、自身の趣味をアウトプットする号もあり、vol.347の芸術祭、vol.348の海、vol.352の駅メロなどは、なかなか研究室の活動では触れない内容であり、新鮮なものになった。

各々の活動が活発になる中で、持続的に発行するために最適な発行頻度について議論したこともあった。継続することを選択し、M2隠居後(12月号以降)もボリューム、クオリティともに従前を上回る号を発行してきた。

マガジン創刊号を改めて読むと、巻末に「爆発的に充実している研究室に何かマガジンが創刊できないだろうか」「時間は闘ってつくるもの」というOB酒井さんの言葉が記されている。各々の活動が活発になっているからこそ、時間をかけてマガジンを発行することに意味がある。20年の時を経て創刊時の思いに立ち返ったといえる。

TO NEXT EDITORS

新M2は4人。人数こそ少ないが全員に個性とこだわりがあり、2024年度のマガジンにおいても存在感を見せてくれた。特にM2隠居後は少人数で担当回数も増える中で、成長著しく、毎号とても読み応えがあった。新体制となり、伝統は引き継ぎつつも、自分たちの納得のいくマガジンを発行し続けてくれることだろう。

木村千咲

街を歩き、人と語り、図面に落とし、ビジュアル化して人に伝えるというプロセスを、マガジンを通じて極めようという気概を感じる。バイタリティと吸収力に驚かされるばかり。特にvol.354の鳳明館特集は圧巻。

松本望実

ミーティング参加率No.1で、担当月以外にも大きく貢献。適応力がありながらも随所に個性を盛り込むマルチプレイヤーであり、イラスト、色使い、レイアウトなど多彩な表現によって楽しい誌面を作り上げている。

王思宇

9月からの参加でありながらも、留学生という立場も踏まえ、「メディア」としてのマガジンを最も意識しているように感じる。視点の鋭さ、デザインスキルともに抜群で、欠かせない存在になること間違いない。

星葵衣

「星さんらしい」デザインが既に確立されているように思う。詰め込みがちなマガジンに余白を生み出し、爽やかさと軽やかさを与えてくれる。個性をベースにした、新しいメンバーとの協働による化学変化にも期待。